

---

# バカと謎と記憶消失

負け組み

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカと謎と記憶消失

### 【Nコード】

N3418V

### 【作者名】

負け組み

### 【あらすじ】

文月学園に転入する前の記憶を失ってしまった 崎宮幸太郎 本人は自覚していない不幸体質のせいでいろんなトラブルに巻き込まれながらも、自分の過去の記憶を探す幸太郎は、どのように変わっていくのだろうか。

## オリジナルキャラクター紹介

崎宮幸太郎・・・・性格は普通。本人は自覚していないが、不幸体質。友のことを誰よりも考えている。記憶消失で、文月学園に入るまでの記憶を一切覚えていない。友をバカにされるとすぐさま殴りかかってくる。明久たちとは、親友同士。常に、木刀とエアガンを所持している。時々、とんでもないことをしでかすときがある。料理は得意中の得意。

崎宮浩二・・・・幸太郎の父。性格は普通（嘘。ほんとはスケベ）。料理は苦手。運動はあまり好きではないが、頭がとてもいい。海が好き。理由は、若い女の水着姿が見られるとのこと。幸太郎の過去を知る人物の一人。

崎宮麗華・・・・幸太郎の母。幸太郎のよき理解者。浩二が余計なことをすると、折檻を行い黙らせる。幸太郎の過去を知る人物の一人。

幸島流下・・・・性格はやんちゃ。幸太郎をだれよりも愛している人物。島田美波と、姫路瑞希をライバル視している。幸太郎をみつけると、すぐさま飛びつこうとする。だが、いつもかわされて頭を悩ませている。人の気持ちがよくわかり、いろんな人の相談相手になっている。幸太郎の過去を知る人物の一人

拓馬勝利・・・・性格は坂本雄二とほぼ同じ。なので、雄二とは気が合う。運動がとても好きで、運動場を50周するほど。怒ると、何をしでかすかわからない。幸太郎の過去を知る人物の一人。

## オリジナルキャラクター紹介（後書き）

初めて投稿しました

キャラの設定をどうしようかと迷っていたところ、うちの友達が乱入してきて勝手にキャラを作ってしまった。

これからもオリジナルをどんどん追加します。

できれば感想などもください

## 第1話 僕とバカとFクラス

俺の名前は、崎宮幸太郎。みんなは幸と呼んでいる。いきなりだが、ハーレムは好きか？俺は大好きだ！

朝4時

「・・・なんで、こんな時間に起こされなきゃならんだ・・・」

「いいから、いいから、いいものを見せてやるよ」

「俺、今日から学校に行かないといけなからもう少し眠らせてくれよ・・・」

今、俺は父ちゃんに無理やり起こされて父ちゃんの部屋に連行されている。・・・なぜ？そんなことは知らん！

「で？いいものってなんだよ・・・眠いんだからちゃっちゃと見せろ！今何時だと思っている！朝の4時だぞ！？今、父ちゃんが起こさなければ夢の中で女達のハーレムが実現したのに！！かえせ！俺の貴重な時間を返せ！ついでに女達を連れて俺の夢だったハーレムを実現してみろ！」

くそ！このくそジジイめ！あとで、木刀で叩きのめしてやる！！

「まあ、まあ、いいものとはこれだ！！どうだ！！すごいだろう！！」

「こ、これは・・・ただのエロ本じゃねえか！！！！なにが「どうだ！！」「すごいだろう！！」だ！思いっきり期待はずれじゃねえか！！！畜生！！！」

このじじいは、エロ本を見せたいがために俺を起こしたのか！？このくそじじい！後で覚えてろ！

「さあ、息子よ！一緒にこの大人の階段を登るための教科書を読もう！」

「そのまえにトイレにいかせてくれ」

このことを母ちゃんにばらしてやる・・・！せいぜい痛い目にあっ

てもらうんだな!!

母ちゃんの寝部屋

「母ちゃん! おきてくれ!」

「ん・・・なによ・・・せっかく気持ちよく寝てたのに・・・」

「母ちゃん! うちの父ちゃんが――」

「またあの人がなんかやらかしたの! ? ありがとう幸! 早速折檻しにいつてくるわ!!」

物分かりがよくて助かったよ。生きて帰れよ! 父ちゃん!

こうして、崎宮家の朝は、騒がしく迎えた。

朝7時

「はあ・・・ぜんぜん眠れなかった」

あのあと、何度も寝ようと心がけたが、結局眠れず、学校に行く時間が来てしまった。ついでにだけど、あのあと、あのくそジジイは白目をむきながら泡を吹いてリビングに倒れていた。それについては、自業自得だと思う

「幸、そろそろ学校いったら?」

そんなくそジジイを見てもなんとも感じてなさそうな母ちゃんは、ある意味すごいと思う

「じゃあ、行ってくるわ」

こうして俺は、2年目の学園生活のスタート地点へと向かった。スタート地点とは、もちろん教室だ

「幸、いつもより遅いぞ!」

玄関の前でドスの聞いた声に呼び止められる

なんだ? と思い、声のしたほうに目をやると、浅黒い肌をしたゴリ――じゃなくて西村先生がいた

「おはようございます。鉄じ――西村先生」

いけない、いけない、いつもの癖で鉄人って呼びそうになった。ち

なみに、鉄人とは、西村先生のあだ名だ。趣味がトライアスロンというところからきたらしい

「いま、鉄人って呼ばなかったか？」

「気のせいです」

「そうか。さっそくお前にプレゼントだ」

そういい、鉄人は封筒を差し出した。表には、崎宮幸太郎と、でかでかと書いてあった

「なんですか？これ」

「このまえの、振り分け試験の結果通知だ」

振り分け試験とは、点数によってクラスわけをする試験である。点数が低ければ、その分設備のひどい教室で勉強をしなくてはならないし、点数がいい人は、設備の整っている教室で勉強できるというわけだ。クラスは、AからFまである。なんとしてもFクラスだけはまぬがれたい。そう思い、封筒をあけた。中には紙があった。早速見てみるとしよう。俺の成績だと、DかEクラスあたりかな？期待を胸に躍らせ、紙に書いているところを見た。そこには、こう書かれていた。

「崎宮幸太郎・・・Fクラス」

こうして俺の最低クラス生活は始まった。

## 第1話 僕とバカとFクラス（後書き）

最初、何を書こうかまよったけど何とかここまでかけました。次の話は、明久たちを出したいと思います



## バカと美少女と試召戦争

### 第二問

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい

「〔1〕得意なことでも失敗してしまうこと」

「〔2〕悪いことがあった上にさらに悪いことが起きる喩え」

姫路瑞希の答え

「〔1〕弘法も筆の誤り」

「〔2〕泣きっ面に蜂」

教師のコメント

正解です。他にも「〔1〕なら「河童の川流れ」や「サルも木から落ちる」、〔2〕なら「踏んだり蹴ったり」などがありますね。

崎宮幸太郎の答え

「〔1〕サルも地獄に落ちる」

「〔2〕泣きっ面にパンチ」

教師のコメント

あなたは悪魔ですか。

土屋康太の答え

「〔1〕弘法の川流れ」

教師のコメント

シュールな光景ですね。

吉井明久の答え

「〔2〕泣きっ面蹴ったり」

教師のコメント

君は鬼ですか。

「はあ・・・なんで俺がFクラスなんだ・・・」

俺は今、Fクラスの教室に向かっている。せめてEかDクラスの方がましだったが、何でよりによって馬鹿達が集まるFクラスなんだ・・・？納得がいかない！

「ん？なんだ？このほかでかい教室は・・・」

3階に着いてすぐに目に移ったのが、Aクラスの教室だった。

「何で学費は同じはずなのにこんな豪華なんだ！？これは一種の差別だ！訴えてやる！」

・・・と、威勢よく言ったのはいいが、ここでこんなこと口走っても何も変わるわけじゃないし、さっさとFクラスに向かうとするか。

二年F組

「・・・」

一瞬俺は言葉を失った。何だこの設備の酷さは！？Aクラスとは天と地ほどの差ではないか！ここはどこかの廃屋か！？反乱ものだぞ！畜生！

俺は、教室の中をじつくりと眺めた。

かび臭い教室

ぼろぼろの卓袱台

綿がほぼすべて抜けている座布団  
教壇にあがっている雄二

・・・ん？雄二？

「おい、雄二。何そんなところで突っ立ってんだよ」

こいつは、坂本雄二。文月学園に入ってから悪友だ。中学のころは悪鬼羅刹と呼ばれるほど強いらしいが、俺には関係ない。ちなみに、俺の中で雄二は敵に回したくない奴ナンバー1だ。

「先生が遅れるらしいからな、代わりに俺が教壇に上がってみた」

「代わりについて、雄二が？何で？」

「一応このクラスの最高成績者だからな」

最高成績者とは、それぞれのクラスの中で一番点数が高い人のことをいう。まあ、そのまんまの意味だ。

「そうゆうことか。これからよろしく頼む雄二」

「おう！まかせとけ」

「さて、どこにすわればいい？」

「どこでもいいらしいぞ」

・・・さすがFクラスと言ったところだろう

「じゃあ、あの席に座らせてもらおう」

そういい、俺は一番後ろから2番目の席に座った

座った後、何分か過ぎたところに3人、俺のところに来た

「おぬしは、幸ではないか。幸もFクラスじゃったのか？」

こいつは、木下秀吉。外見だけを見れば女の子にしか見えないが、戸籍上では男らしい。さんねんだ。こんなかわいい奴が男だなんて・・・きつとこれは間違いに決まってる、そう願いたい。それにしても、かわいいな・・・

「ああ、俺もFクラスなっちまったんだ。これからもよろしく。あ、そうだ。優子にもよろしくっていてくれ」

優子とは、秀吉の姉である。始めてあったときは、「何！？秀吉そっくりの奴がいる！！」もしかしてクローン技術はここまで進歩していたのか！？と、驚いた。そのあと、優子に関節技をくらい意識を手放してしまったが・・・一応、俺と優子は同い年だ。

「任せたのじゃ」

そういって、秀吉は自分の席に戻った。か、かわいい・・・

「あら、幸もここだったの？」

こいつは、島田美波。すらりとした足、ポニーテール、ペツタンコの胸を持ち合わせた美少女である。正直に言う。俺は貧乳が大好きだ！！

「お、美波か。今日も胸がペツ・・・タン・・・コ」  
け、頸動脈が・・・

「幸？今なんか言った・・・？」

「な・・・何も・・・いつて・・・ないです。だから・・・頸動脈から・・・手を離して・・・！」

「今度いったら命がないものと思いなさい！」

「了解です」

お、おそろしや・・・女ってものは怖いな。うかつにしゃべったら今度こそ命がなくなるぞ・・・

呼吸を落ち着けた後、不意に後ろから呼んでいるような感覚がした。振り返ると、そこには土屋康太こと、ムッツリーニがいた。ムッツリーニという名前の由来はムッツリスケベから来ている。

「・・・幸も、ここだったのか？」

「ああそうだ。それと聞きたいことがあるんだが——」  
「・・・？」

「——その手に持っている盗聴器をどこに仕掛けるつもりだ？」

「・・・！！・・・気にするな」

いや、気にするなといわれても・・・無理だろ

「じゃあ、その盗聴器を何に使うつもりだ？」

「・・・何にも使わない」

うそつけ

「・・・まあ、いい。これからよろしく。」

「・・・よろしく」

お互い硬い握手をした後、廊下から足音がした。他にもくるのか？  
後は誰だろう

その足音の主が教室に入ってきた。

「すみません、遅れちゃいましたっ！」

「早く座れ、このウジ虫野郎」

・・・いきなり罵倒か。流石は雄二といったところだろう

今、罵倒されていたのが吉井明久。俺の悪友の一人だ。明久は、観察処分者という称号を受けている。観察処分者とは、学習態度、学習意欲が足りない問題児に与えられる処分だ。ただし、観察処分者の召喚獣は、他の召喚獣とは違い、物に触れることができる。他の召喚獣が触れるのは相手の召喚獣だけだ。だが、物に触れるといっても、生活が楽になるわけではない。観察処分者は、召喚獣が受けたダメージをフィードバックで召喚者自体にもダメージが加えられる。決して楽になるわけではないのである。あと、観察処分者を簡単に言くと、「バカの代名詞」だ。

「・・・雄二？何やってんの？」

「先生が遅れるらしいから、代わりに俺が教壇に上がってみた」

「代わりって、雄二が？何で？」

「一応このクラスの最高成績者だからな」

「え？それじゃ、雄二がこのクラスの代表なの？」

「ああ、そうだ」

・・・明久の心が丸見えだ。おそらく、あいつはこうゆう風に思っているのだろう。「雄二を説得すればこのクラスを動かせる」そう思っているのだろう。確かに一理あるな。

「これでこのクラス全員が俺の兵隊だな」

ふんぞり返って床に座っているクラスメイト達を見下ろしている雄二

・・・いやな感じだな

「えーっと、ちょっと通してもらえますかね？」

明久の後ろから覇気のない声が聞こえた。

そこには寝癖のついた髪にヨレヨレのシャツを貧相な体に着た、いかにもさえない風体のオジサンがいた。どうやら先生らしい。

「はい、わかりました」

「うーっす」

明久と雄二は、俺の後ろの席に座った

「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎です。よろしくお願いします」

福原先生は黒板に名前を書こうとして、やめた。・・・何回もうが本当に酷い設備だな。チョークすらまともにないよ・・・

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されますか？不備があれば申し出てください」

おおありじゃあ！！ばかやろう！！

「先生、俺の座布団に綿がほとんど入ってないです」

俺は早速不備を申し出た

「あー、はい。我慢してください」

あんたそれでも教師かい！？泣いてやる！泣きつくしてやる！！

「あれ？幸もFクラスだったの？」

すると、後ろから明久が話しかけてきた

「ああ、これからもよろしくな明久」

「こちらこそ」

明久と話している間も不備の申し出がたえなかった

「先生、俺の卓袱台の脚が折れています」

「木工用ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください」

「センス、窓が割れていて風が寒いんですけど」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの至急を申請しておきますよう」

・・・本当に酷い設備だ。いずれ、反乱が起こってもおかしくないな  
「必要なものがあれば極力自分で調達するようにしてください」

先生、それは簡単に言うと言自給自足って言う意味ですよ？意味わかっています？

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします」

さて、恒例の自己紹介タイム！さあ、最初は誰でしょう？

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

おーっと！最初は、戸籍上では男だが女と間違われるほどかわいい秀吉だあ！！いやあ、いつ見てもかわいい・・・

「――と、いうわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」

さてさて、お次は誰でしょう！！

「・・・土屋康太」

お次は、ムツツリでスケベなナイスガイの男子、ムツツリーニだあ！！ここだけの話、ムツツリーニは自分が経営しているムツツリ商会というものを立ち上げてるそうだ。俺もあいつの店の会員になろつと。

さて、お次は！！

「島田美波です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です」

うおおおおお！！究極のペツタン胸を持つ美波だあ！！ヒヤッハア！！

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は――」

きつと、究極のペツタン胸を持っている美波だ！きつとかわいい趣味をしているはずだ！

「――趣味は、吉井明久と崎宮幸太郎を殴ることです！」

・・・なんと恐ろしい趣味を持っているんだ。俺はかまわないが、明久がものすごいおびえてるぞ・・・？

「はろはろー」

「・・・あう、島田さん」

「まて、なぜその中に俺まで入ってるんだ？」

「ついさっきのお返しよ」

やばい、美波の後ろからドス黒い殺気が渦巻いている・・・

「さ、さあ、次行こう！・・・って、次俺か」

さて、やっぱりここはスタンダードな自己紹介を・・・

「えー、俺の名前は崎宮幸太郎。気軽に幸、太郎って呼んでくれて

もかまわない。焼きそばが大好きだ。ついでに言うと、俺と優子は  
同じ年関係で——おいまて、みんななぜ俺にカッターを向ける。  
それに何でそんなに持っているんだ!? 明久! 何とかし——おい  
! お前まで俺を殺すきか! ?」

ちっ! 今日は何もないと思って木刀とエアガンは家においてきてし  
まった! くそ! どうすれば・・・

「だまれ、裏切り者! 僕は他人の幸福が誰よりも嫌いなんだ! !」

「・・・明久、もし俺に攻撃してみろ。そのときは——」

「はっはっは! 何言っても攻撃はやめない! !」

「——お前の好きな人を放送で学園中に広めてやる」

「みんな! カッターをしまうんだ!」

「だが、このままこいつを野放しにしているのか! ?」

「そうだそうだ! ! !」

「また今度八つ裂きにすればいい! それまで力をためておこう」

「「「・・・ちっ」」」

ふう、なんとか難は逃れたな

「いまは、自己紹介の時間です。静かにしてください。次の人、お  
願います」

そこで、福原先生が注意した。遅すぎるよ? 注意するの・・・

「——コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に「ダーリン」て  
呼んでくださいね!」

「「「ダーリーリーリーーン! ! !」」」」

・・・胃液が逆流しそうだった。それにしても気持ち悪すぎる。に  
どとこんな悪ふざけはよしてほしいぞ・・・

「——失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願い致します」  
どうやら、明久も胃液が逆流しそうになったらしい。後ろで明久が  
口に手を当てている。その気持ちわかるけど・・・ついさっきの件  
もあるから自業自得って奴だ

そのあとも、自己紹介が淡々と進むだけだった。そして、眠くなり  
始めたころ、教室のドアが開いた



「あの、遅れて、すいま、せん・・・」

「「「えっ？」」」

みんなが驚いた顔をしている。そりゃそうだ。Aクラス並の成績を持つ姫路さんがここにいるはずがない。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんをお願いします」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします・・・」

いま、自己紹介していたのは姫路瑞希さん。せいせきは、Aクラス並の成績だ。だがなぜそんな彼女がここにいいのか、それは聞いてみないとわからないな。ちょっと質問してみるか。

「はい、質問です。なぜ、姫路さんはここにいますか？」  
これはみんなの疑問だ。

「そ、その・・・」

緊張した面持ちで身体を硬くしながら姫路さんが口を開く。ふむ。小動物みたいだ。

「振り分け試験の最中、高熱を出してしましまして・・・」  
その言葉を聞き、Fクラス全員が「なるほど」という顔をした。そのあと、あちらこちらから言い訳が続出。

「そう言えば、俺も熱〔の問題〕が出たせいでFクラスに」

「ああ。化学だろ？アレは難しかったな」

「俺は弟が事故にあったと聞いて実力を出し切れなくて」

「黙れ一人っ子」

「前の晩、彼女が寝かせてくれなくて」

「今年一番の大嘘をありがとう」

・・・ばかばかりだ。なんでこんなバカの集団のところに来たんだろう・・・

「で、ではっ、一年間よろしくお願いしますっ！」

そんな中、逃げるように明久と雄二の隣の空いている卓袱台につこうとする彼女。うむ。ほんとに小動物みたいだ。かわいい・・・

「き、緊張しましたあ・・・」

席に着くや否や、安堵の息をついて卓袱台に突っ伏す姫路さん。これはチャンスだ！！ここで話しかけて仲良くなり、そして結婚まで一直線だ！！

「「あの{さ}、姫——」」

「姫路」

そこで雄二の邪魔が入った。畜生！後で覚えてろ！斜め後ろを見ると、明久も話しかけようと横へ体を卓袱台から出すも雄二に邪魔されて落ち込んでいる。明久、がんばれ

「は、はいっ！何ですか？えーっと・・・」

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

「あ、姫路です。よろしくお願いします」

「あのさ、姫——」

「ところで、姫路の体調はいまだに悪いのか？」

おのれ！また邪魔をするきか！！

「あ、それは僕も気になる」

明久！お前までも俺の恋路を邪魔しにきたのか！？許さん！！

「よ、吉井君！？」

・・・なんだろう。明久って、そんなに嫌われてるのか？いや、そんなはず——」

「姫路。明久がブサイクですまん」

雄二、それはフォローしているとは言わないぞ！！あ！今の一言で明久が精神的に崩壊しそうになっている！！

「大丈夫か！？明久！！」

「・・・あ、幸か。ありがとう、僕の味方は幸しくないよ・・・畜生！雄二！明久の変わりに俺が正義の鉄槌を食らわせてやる！！そのとき、姫路さんがあわてて口を開いた

「そ、そんな！目もパッチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！その、むしろ・・・」

「よかったな！明久！外見をほめられたぞ！しかも姫路さんに！」

「ううう・・・やっぱり僕の味方は幸しくないよ・・・」  
すると、雄二が口を開いた

「そういわれると、確かに見てくれは悪くない顔をしているかもしれないな。俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気もするし」

よかったな！明久！他にもお前の外見をほめてくれている奴がいたぞ！！

「え、それは誰——」

「そ、それって誰ですかっ!？」

明久の声を覆いかぶさるように姫路さんが同じようなことを質問した。さすが、女の子だけあって、こうゆう手の話には敏感だね

「確か、久保——」

久保？久保ってまさか・・・！

「——利光だったかな」

久保利光Ⅱ男

「雄二、それ以上言ったら明久の精神が崩壊してしまう！おい！起きろ明久！！」

「・・・もう僕、お婿にいけない」

「だいじょうぶだ！そんな変態が来ても俺が追い払ってやるから！頼むから目を覚ましてくれ！！」

「半分冗談だ。安心しろ」

「「え？残り半分は？」」

「そこで声をそろえて質問するな」

「だって、気になるじゃないか。ねえ？幸？」

「ああ」

「ところで姫路。体は大丈夫なのか？」

「あ、はい。もうすっかり平気です。」

「「綺麗に無視するな！」」

「はいはい。その人たち、静かにしてくださいね」

そこで、先生が教卓を叩いて注意してきた

「あ、すいませ——」

バキィツ バラバラバラ・・・

突如、先生の前で教卓がごみ屑と化す。・・・本当に酷い設備だ

「えー・・・替えを用意してきます。少し待っていてください」

気まずそうに告げると、先生は足早に教室から出て行った。ほんと酷いなこのクラスの設備。そういえば、この言葉何回目かな？

「あ、あはは・・・」

姫路さんが苦笑いしている。そりゃそうだ。いきなりこんな酷い設備の中で勉強するのだからな。こんかいは、姫路さんに同情の涙をささげずにはいられない。

「・・・雄二。ちょっといい？」

そのとき明久が雄二に声をかけた

「ん？なんだ？」

「ここじゃ話にくいから、廊下で」

話にくいこと？どうゆう内容なんだろう。

「別にかまわんが」

そして、明久と雄二は廊下に出て行った。出て行く途中、明久と姫路さんの目が合った。くそ！羨ましい限りだ！

しばらく、姫路さんと雑談をしていると、明久と雄二が戻ってきた。

その後に福原先生も戻ってきた。

そのあと、残りの人たちの自己紹介も終わって、最後は雄二ただ一人になった

「坂本君、君が自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

先生に呼ばれて雄二が席を立つ

「坂本君はFクラスのクラス代表でしたよね？」

福原先生に問われ、鷹揚にうなづく雄二。まあ、別に自慢できることじゃないけどね。

それにもかかわらず、雄二は自信に満ちた表情で教壇に上がり、俺らのほうに向き直った。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

もう一回言っておく。別に自慢できることではない

「さて、皆に一つ聞きたい」

さすがは、神童と呼ばれていた雄二だ。間の取り方もうまい皆の様子を確認した後、雄二の視線は教室内の各所に移りだす釣られて俺らも雄二の視線を追い、それらの備品を順番に眺めていった。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが——」

一呼吸おいて、静かに告げる。

「——不満はないか？」

「「「大ありじゃあっ!!」「」」」

Fクラス全員の魂の叫び。すばらしい!俺もその魂の叫びの中に入ってくれ!!

「だろう?俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

「そうだそうだ!」

「いくら学費が安いからといって、この設備はあんまりだ!改善を要求する!」

「俺も同意だ!」

「そもそもAクラスだって同じ学費だろ?あまりに差が大きすぎる!」

戦友たちの反応に満足したのか、自信にあふれた顔に不敵な笑みを浮かべて

「これは代表としての提案だが——」

これから戦友となる仲間達に野性味満天の八重歯を見せ、

「――FクラスはAクラスに「試験召喚戦争」を仕掛けようと思う」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた。

## バカと美少女と試召戦争（後書き）

結構長くなってしまいました。次は試召戦争〔試験召喚戦争〕の話を書きたいと思います

## 試召戦争と謎の記憶

試召戦争（試験召喚戦争）とは、（試験召喚システム）を使い、自らの姿をデIFOホルメされた（召喚獣）を使い、テストで取った点数で戦う戦争のことを指す。この戦争で勝つと、お互いの施設を交換できる。ただし、自ら宣戦布告をして負けたら、一クラスぶん設備が下がってしまう。例に挙げると、BクラスがAクラスに宣戦布告をして勝つとお互いの設備を交換することができる。

もう一つ例に挙げると、FクラスがDクラスに宣戦布告をし、負けるとFクラスの設備がさらに酷くなると、こういう風な感じだ。

「勝てるわけがない」

「これ以上設備を落とされるなんていやだ」

「姫路さんがいたら何もいらない」

・・・今、姫路にラブコールかけた奴。あとで明久と一緒に成敗してやる。顔はちゃんと覚えたから覚悟しろ

確かに今の俺達じゃあ、Aクラスには絶対といっても過言でないほど勝利の見込みがない。だが、そんな状態でも勝てるといっている雄二はAクラスに勝つための作戦があるに違いない。そんな作戦がなくAクラスに宣戦布告をするほど雄二はバカじゃない。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせて見せる」

雄二は、そう断言した。今の雄二はとても気合が入っている。相当勝つ自身があるのだろう。

「何を馬鹿なことを」

「何の根拠があってそんなことを」

否定的な意見が教室中に響き渡る

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」



勝つことのできる要素 ね・・・

「いったいその要素は何だよ。早く教えてくれ」

俺はじれったく雄二に質問した

「まあ、そうじれったくするな。今から説明してやる」

そういうと、得意満面な顔を見せ、ある一人の男に目をやる

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「・・・！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

相変わらず、すごい下心だ。まさかそこまでやるとは・・・おそろべし

「土屋康太。こいつがあ有名な、ムツツリーニだ」

土屋康太という名前は知れ渡っていないが、ムツツリーニという名前だけは別だ。男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑を以ってあげられる

だが、さすがに島田と瑞希さんは、聞いたことは無いようで、頭の上には？マークが出ている

「ムツツリーニだと・・・？」

「馬鹿な、ヤツがそうだというのか・・・？」

「だが見ろ。あそこまで明らかな覗きの証拠をいまだに隠そうとしているぞ・・・」

「ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ・・・」

ムツツリーニ、覗いた跡を必死に隠さなくても、その行動だけでお前がスケベということが丸わかりになるだけで、むしろむなしくらいだぞ・・・

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」

「えっ？わ、私ですかっ？」

姫路さん、それ以上そんな小動物みたいな行動をとられると俺の理性が危うくなる・・・！

「ああ。うちの主戦力だ。期待している」

たしかに。姫路さん以上の点数を持っているひとはAクラス代表ぐらしいしかないしな

「木下秀吉だっている」

秀吉は、学力ではあまり名前が聞かないけど、ほかの事で有名だったりする。演劇部のホープだとか秀吉そっくりの姉だとか・・・実際に会ってみたいな。今度秀吉に頼んでみるか

「おお・・・！」

「ああ。アイツ確か、木下優子の・・・」

「当然俺も全力を尽くす」

「確かになんだかやってくれそうな奴だ」

「坂本って、小学生のころは神童とか呼ばれていなかったか？」

「それじゃあ、振り分け試験のときは姫路さんと同じく体調不良だったのか」

それはありえない

「実力はAクラスレベルが二人もいるってことだよな！」

たしかに、これだとAクラスとも互角に渡り合えるかもしれないな

「それに崎宮幸太郎もいる」

・・・シン――

・・・心が根元からへし折られそうだ

「おい！！何でそこで俺の名前が出てくるんだよ！！俺はいつも普通に生活しているはずだぞ！！」

「いいじゃないか。それに、あのことをずっと隠し通せるとも思っていたのか？」

やばい。冷や汗が・・・！

「ま・・・まさか・・・アレを言うのか・・・？」

「ああ！もちろん包み隠さず暴露する」

「酷！」

「こいつのあだ名は「記憶消去者」だ」

・・・ほんとに言っちゃったよコイツ・・・

俺はどうやら、いつかはわからないが人の記憶を抹消することができるようになっていたらしい。なぜそんなことができるかはわからないが、俺がコイツの記憶をここからここまで消したいと頭の中で念じ、そしてその記憶を消したいと念じた人に触れるとその人の記憶が抹消されるという、世にも不思議な能力である。このことは、一部のひとと家族しか知らない。その一部というのが雄二なんだが・・そのあだ名ってもう広まっているの？

「馬鹿な！そいつがその「記憶消去者」なのか！？」

「そんな！そいつがここにいるなんて・・幸！後で握手を！！（これで、彼女にふられたことを忘れることができる！）」

「さて！俺が先だ！（俺が先に記憶を消去させてもらう！）」

お前らの考えていることが丸見えだバカ・・それに、もうお前ら女に振られたのか？ずいぶんとご苦労なこった

「幸。ずいぶんと人気なようだな。よかったじゃないか」

「はあ・・あまりばらしたくなかったんだがな・・」

そのとき、姫路さんと美波が話しかけてきた。小声で。

「（あの、幸君。ちょっといいですか？）」

「（ん？なんだ？美波まで・・なるほど。そうゆうことか）」

「（なによ、ニヤニヤしちゃって・・）」

「（おまえらは、俺にこういたいんだろう。「明久君に恥ずかしいところを見られたらそこのとこだけ記憶を消してください」と）」

「（（！？））」

「（だてに「記憶消去者」といわれてないということだ。それに、お前らが明久のことを好きだってことはとくにわかっていることだからな）」

「（・・・で？幸はこのお願いきいてくれるの？）」

「（却下だ）」

「（・・・一応理由は聞かせてもらおうわよ）」

「（なんでだめなんですか！？）」

「（なんでって、そんな卑怯な手で明久を振り向かせようというと

ころが気に入らんからだ)」

「「(・・・)」」

「(もう、これで俺からの話は終わりだ。明久のことを本気で好きだったら、実力で振り向かせろ。)」

「(・・・わかったわ。がんばってみる)」

「(わかればいい。姫路もがんばれ)」

「(・・・はい。がんばります・・・美波ちゃん！吉井君のことは絶対渡しませんからね！)」

「(その言葉、そのまま返すわ！！絶対負けるものですか！！)」  
「なに話してたの？幸？」

「・・・ほんとにお前、愛されてるな・・・羨ましいぞ・・・！」

「え？何へんなこと言ってるのさ！僕は誰にも愛されるような男じゃないよ？」

「・・・美波と瑞希もくろうしてるんだな・・・」

「「・・・ええ」」

「へ？何言ってるんだよ？幸、教えてよ」

「・・・お前が鈍感ということだ」

「???」

こいつは・・・！どんだけ鈍いんだ！？あきれて声も出せないぞ！

「・・・そろそろ話していいか？」

雄二が、やっと話が終わったかという顔で言う

「ああ、いいぞ」

「じゃあ、続きを言う。ほかにAクラスに勝つための要素を持っているやつがいる」

ふむ。こいつはだれだろう。まさか、明久だとか言わないよ――――

「そいつの名前は、吉井明久だ」

――――ほんとに言うとは思わなかった

## 試召戦争と謎の記憶（後書き）

変なところでとめてすみません！

今日はちよつと出かける用事があつたので・・・

それにしても、だんだん幸の性格がキャラ紹介のときと全然違うような感じになっていてちよつとあせってます。

できれば気にせず読んでくれたら助かります。

感想をお待ちしております

## 試召戦争と謎の記憶 その2 (前書き)

試召戦争と謎の記憶の続きです

## 試召戦争と謎の記憶 その2

「ちょっと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！まったくそんな必要はないよね！」

「誰だよ吉井明久って」

「聞いたことないぞ」

「吉井って、あのバカの代名詞である「観察処分者」って呼ばれている奴じゃないか？」

あつ、今明久にとって致命的な発言をしてしまった。むこうで明久が冷や汗をものすごい出してるぞ

「そうだ。こいつは、観察処分者と呼ばれている。」

そして、それを肯定する雄二

「肯定するな、バカ雄二！」

残念ながらあつてるぞ、明久。

「あの、それってどういうものなんですか？」

姫路さんが小首を傾げている。ここは説明したほうがいいかな？

「そこは俺に説明させてもらう。まあ、具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういうった類の雑用を、特別として物に触れるようになった召喚獣でこなすといった具合だな。」

「そうなんですか？それって凄いですね。試験召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら便利ですよね」

「あはは、そんな大したもんじゃないんだよ」

たしかに、そんなに大したものじゃない。観察処分者の召喚獣は、物に触れることができるのは確かだが、それは、召喚フィールドが展開されているときだけだ。召喚フィールドが展開されていないところでは召喚できないから、ほぼ、その能力はここ文月学園にいるときしか役に立たない。それに、観察処分者の召喚獣は、召喚獣が受けた負担は約3分の1は召喚者が受けることになる。便利になる

ってわけではないな。

「おいおい。〔観察処分者〕ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ？」

「だよな。それならおいそれと召喚できないやつが一人いるってことになるよな」

バカの癖によくわかったな。まあ、こんなことに気づかない奴は明久以上のバカだな

「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」

酷い言いわれようだな、明久。

「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言うべきところだよな？」

「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う」

「うわ、すっごい大胆に無視された！」

こいつらを見ているとコントを見ているようで実に面白いな。そこが、雄二と明久の面白いところだな。

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

「「当然だ！！」」

「ならば全員筆を執れ！出陣の準備だ！」

「「おおーっ！！」」

「俺達に必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ！」

「「うおおーっ！！」」

「お、おー・・・」

姫路さんが小さく拳を上げた。ものすごくかわいい・・・そんなかわい子に愛されている明久は羨ましい・・・！

「明久にはDクラスへの宣戦布告の死者になってもらう。無事大役を果たせ！」

「・・・ねえ、今字が違くなかった？それに、下位勢力の宣戦布告の使者ってたいいてい酷い目に遭うよね？」

「大丈夫だ。奴らがお前に危害を加えることはない。騙されたと思



って行ってみろ」

嘘だな、絶対。

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている」

悪鬼羅刹、神童と呼ばれていた奴で、翔子という人の恋人〔雄二は認めていない〕で、悪巧みをする右に出るものはいない奴

「・・・幸。今、むしろようにお前を殴りたくなっただが、なんか変なこー」

「気のせいだ」

「そ、そうか。ならいい」

相変わらず勘だけはいいな

「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」

「ああ、頼んだぞ」

「ああ、がんばって逝って来い」

「幸、今字が――」

「気のせいだ」

「そ、そう？なら行ってくる」

明久も時々勘がいいときがあるな

「騙されたあっ！！」

明久があちこちにあざを作って戻ってきた。ふむ・・・

「「やはりそうきたか」」

「やはりってなんだよ！やっぱり使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！しかも幸まで何言ってるの！？僕は悲しいよ・・・」

「すまん、明久。今日は木刀とかエアガン持ってくるの忘れたからあまり行きたくなかったんだ」

これは本当だ

「・・・まあいいや。今度こうゆうときがあったら、一緒に来てよ。それで許すから」

「さすが明久だな。よし、その条件飲んでやる」

「吉井君、大丈夫ですか？」

姫路さんが明久の体を心配している。・・・なんて優しいんだ・・・！俺もああゆう風な彼女がほしい・・・！

「あ、うん。大丈夫。ほとんどかすり傷」

「吉井、本当に大丈夫？」

いつもは明久に暴行を加えている島田さんが明久のことを心配している・・・意外と優しいところがあるんだな

「平気だよ。心配してくれてありがとう」

「そう、良かった・・・。ウチが殴る余地はまだあるんだ・・・」  
前言撤回 やっぱり島田さんは暴力少女だった

「ああっ！もうダメ！死にそう！」

明久・・・今回は流石に同情の涙を流さずにはいられない

「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行うぞ」

そういつて、雄二は扉を開けて外に出て行った。もう少し友達をいたわるといふものを勉強したほうがいいと思う。そのまえに、雄二は明久を友達と見ているのかが疑わしい・・・

「あの、痛かったら言ってくださいね？」

そう告げて、姫路さんは小走りに雄二の後を追っていった。本当に優しいな、姫路さん。

「大変じゃったの」

秀吉が、明久の肩を叩いて廊下に出る。やっぱり男としてはどうしても見えない

「・・・〔サスサス〕」

自分の頬の辺りをさすりながらムツツリーニが続く

「ムツツリーニ。覗いていた時の畳の後ならもう消えてるよ？」

「・・・！！〔ブンブン〕」

「おい、ムツツリーニ。今更否定されても、ムツツリーニがHなのは知ってるからな？」

「・・・！！〔ブンブン〕」

「ここまでばれているのに否定し続けるなんて、ある意味凄いなと思う」

「同感だ」

「・・・!!」  
「ブンブン」

「「――何色だった？」」

「みずいろ」

即答か。

相変わらず凄いな、ムツツリーニ。

「やっぱりムツツリーニはいろいろな意味で凄いよ」

「・・・!!」  
「ブンブン」

そうやってのんびりと教室内で話をしていると、

「ほら吉井。幸も、来るの」

ぐいっと、明久の腰を、俺の首をわしづかみにされ、引っ張られていく。

「ぬお!! 首を鷲掴みにするな!! 俺が何をしたというんだ!？」

「なんとなくよ」

この暴力少女め・・・!

そのあと、まあちよつといろいろな話をしながら屋上にいったんだけど、そのときの話は原作を!

「明久。宣戦布告はしてきたな？」

「一応今日の午後二回戦予定と告げてきたけど」

「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね？」

「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともなものを食べろよ？」

「??? まともなもの? ふつうに弁当を食っているんじゃないのか？」

「そう思うならパンでもおごってくれとうれしいんだけど」

「えっ? 吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

「そうなのか? 明久」

「いや。一応食べてるよ」

「・・・あれは食べているといえるのか？」

? 雄二は何を言っているんだろう・・・

「何が言いたいのさ」

「いや、お前の主食って——水と塩だろう？」

・・・は？水と塩が主食だって？そんなことがあるはずがない！そんなものだけで生きていけるのなら苦労はしないぞ！

「失礼な。きちんと砂糖だって食べているさ！」

・・・どうやらここに怪物がいるようだ。なんてやつだ・・・！塩と水と砂糖だけで生きてきたのか！？

「あの、吉井君。水と塩と砂糖って、食べるとは言いませんよ・・・」

「舐める、が表現としては正解じゃろうな」

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな」

「し、仕送りが少ないんだよ！」

なるほど、そうゆうことか。まあ、それについては明久の自業自得だな。だが、このままほっといたら、いずれ明久が栄養失調で死んでしまう！・・・しょうがない。俺の飯をあげるか

「ほら、明久。カロリーメイトだ。食え」

「え！？いいの！？ありがとう！君は命の恩人だ！！」

「まったく、少しは栄養取れよな」

はぁ・・・頭が痛い

## 試召戦争と謎の記憶 その2（後書き）

今日は、勉強という地獄を見せられるはめになってしまったので、今日はここまでにします。

次は、姫路さんが皆に地獄への切符〔姫路さんの弁当〕を作ってきてくれるというところと、試召戦争について書きます。

感想お待ちしております

### 試召戦争と謎の記憶 その3

「あの・・・明久君？」

「なに？姫路さん」

「・・・もし、良かったら私がお弁当作ってきましようか？」

「あ？」

なんという優しい心を持っているんだ！雄二も見習ってほしいくらいだ！

「明久。良かったな！女の子の手作り弁当を食べれるんだぞ！うらやましい限りだ・・・」

「幸も、いつかは食べれるといいね！」

「・・・」

「幸？何でそこで黙っちゃうの？ねえ、幸！」

「・・・なんでもない」

「おい幸。何でそこで落ち込むんだ？もしかしてまえに告白して振られたからか？」

ドス！

「・・・」

「・・・まさか本当に振られたのか！？」

「なんというか・・・ごめん。幸」

「・・・いいんだ。所詮過去のことだ」

「・・・ふーん。瑞希ってずいぶん優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて」

俺のことはそっちのけで島田は姫路さんに話しかけた。なんだか面白くないってかんじの顔をしながら。

「なあ、島田」

「なに？」

「お前も明久に弁当を作ってあげたらどうだ？」

「なっ・・・！！」

その瞬間、美波の顔が真っ赤になった

「おーい、顔が真っ赤だぞ？」

「う、うるさい!!!」

「ぬお!ま、まて、その間接はそっちにはまが〔ゴキ〕ったあああ!!!」

「もう・・・まあ、いいわ。私も作ってきてあげる」

そしてまた俺をそっちのけで話す島田

「え・・・あ、ありがとう島田さん！」

「・・・どういたしまして」〔カァァ〕

そしてさらに真っ赤になる島田

「どうしたの島田さん!顔がものすごく赤くなってるよ!？」

「・・・き、きのせいよ」

「後で保健室につれてってあげるから――」

「だから気のせいだって言ってるでしょう!!!」

「あたたたた!!!やめて島田さん!!!間接が増えちゃう!!!」

「・・・ほんとに明久は鈍感じゃのう」

「・・・鈍男」

「・・・そろそろ本題に入っていいか？」

そこで雄二が話しかけてきた

「ん?あ、そうだった。まだ試召戦争について話をしてなかったな」

「おまえ、腕は大丈夫なのか？」

「ああ、もう治った」

「回復はやいな!？」

それが俺の体質だ

「雄二。一つ気になっていたんじやが、どうしてDクラスなんじや?段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう?」

「そういえば、たしかにそうですね」

「たしかにそうだが、よく考えてみる。ここにいるメンバー達を」  
そこで、明久が口を開いた

「えーっと、ここには親友が一人と美少女二人とバカが二人とムツリが一人いるけど・・・」

「誰が美少女だと!？」

「ええっ!? 雄二が美少女に反応するの!？」

「雄二、今のお前は最高に気持ち悪かったぞ」

「とにかくそのツラかせや」

「・・・ポッ」

「ムツツリーニまで!? どうしよう、僕だけじゃツツコミきれない!? 幸! 君もそう思うでしょう!？」

「明久、今俺はお前にかまっている余裕がないんだ。また後にしてくれ」

「あ! まってよ幸!!」

すまん明久。俺は正直疲れた。

「まあまあ。落ち着くのじゃ、代表にムツツリーニ」

「そ、そうだな」

「いや、そのまゑに美少女で取り乱すことに対して突っ込みいれたいんだけど」

「明久、それ以上突っ込みいれようとしないうがいいぞ。疲れるだけだ」

「・・・うん」

わかってくれて何よりだ

「さて、ついさっきのつづきだが、ここのメンバー達がいれば勝利は目前だ」

「どうして？」

「まず、このクラスには姫路がいる。姫路の実力は皆も知っているな？」

「うん」

「姫路に問題ない今、正面からやり合ってもEクラスには勝てる」

「たしかに、姫路さんだけでEクラスに勝てそうだからな」

「Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦っても意味がな



いつてことだ」

「？ それならDクラスとは正面からぶつかるど厳しいの？」

「ああ。確実に勝てるとはいえないな」

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

たしかにそうだ。目標はAクラスであってDクラスではない。第一、求めるものが違う。

「初陣だからな。派手にやって今後の景気づけにしたいだろ？それに、さっき言いかけた打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな」

「あ、あの！」

姫路さんがいつもより大きい声で話しかけてきた。

「ん？ どうした姫路」

「えっと、その。さっき言いかけた、って・・・吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合ってたんですか？」

「それは俺も気になる」

「ああ、それか。それはついさっき、姫路のためについて明久に相談されて——」

「それはそうと！」

そこで、明久が雄二の台詞をさえぎるように大きな声で話しかけてきた。

それはそうと、明久は相変わらず優しいなあ。姫路さんのために試

召戦争をやるなんて・・・

「・・・ちよつといいか？」

「なんだ？」

「・・・ちよつとトイレにいかせてくれ」

「ああ、いいぞ。ほかに話すことはないからな」

「じゃあ、ちよつといってくる」

「ふう、すっきりした」

俺は、トイレで用を足して教室へ戻ろうとしていた。

「・・・ん？ あれは・・・優子か。ちよつと話しかけてみるか」

そのとき・・・鋭い頭痛が起きた

「くっ!! 何だこの頭痛は・・・!」

そのとき、どこからか声が聞こえてくる

「・・・は・・・っは・・・!・・・とが・・・ぬのは・・・らいだろう  
!!」

うまく聞き取れない・・・!さらに・・・頭痛が酷くなってきた・・・  
・!

「・・・あ、・・・泣きわめけ!!!!」

そこで、俺は意識を手放した

### 試召戦争と謎の記憶 その3 (後書き)

どこまで引き伸ばすつもりだ！？と思っている方はすみません！！  
つぎからDクラスとの試召戦争を書きます

**試召戦争と謎の記憶 短編（前書き）**

試召戦争と謎の記憶 その3の続きです

## 試召戦争と謎の記憶 短編

「・・・ん？ここは・・・どこだ？」

幸は、見知らぬ建物の中にいた

「おいおい・・・俺は学校にいたはずだぞ？なんでこんなところに・・・」

すると、後ろの扉が勢いよく開き、見知らぬ人が入ってきた

「はあはあ・・・ここまでくれば大丈夫か？」

「なんだ？あいつは・・・」

「・・・よし、ここなら見つからずにいけそうだ・・・さっそく連れてくるか」

すると、その見知らぬ人は戻っていった

「・・・ほんとなんだったんだ？あいつ」

すると、またその見知らぬ人がきた・・・小さな女の子を連れて

「へへへ・・・この人質を使えばたんまり金をもらえってわけだ・・・こんなおいしい話はないぜ」

・・・なんだと？

「おい！そこのごみ野郎！！」

俺は、その誘拐犯に話しかけた

「さて、こいつを・・・そうだな、あの真ん中のところに丁度いいのがあるな。あそこに縛り付けるか」

そういい、俺のところに向かってきた

「おい！ちょっと来い——」

と、掴みかかろうとして——

スッ

——すり抜けていった

「・・・は？」

・・・いったい俺の体に何が起きたんだ？これが幽体離脱ってやつか！？

「いやいや！そんなはずはない！第一、俺死んでないぞ！」  
そのとき、急に目の前が暗くなった

「・・・ん？」

気がつくと、俺は保健室のベッドの上に横たわっていた

「今のは・・・夢だったのか」

「あら、目が覚めたのね」  
不意にベッドの横から声がした。その声の主を確認しようと、横を向くと

「・・・なんだ、優子か」

「なによ、せっかく看病してあげたのにその態度は」

「すまんすまん。ありがとう、優子」

「どういたしました」

おっと、そうだった

「はやくFクラスにいかないと」

「あら、もういつっちゃうの？」

「ああ、じゃあな優子」

## 試召戦争と謎の記憶 短編（後書き）

えー、更新が遅れてしまい、すみません。

テスト勉強などで忙しかったのでなかなか書けなかったです  
今日もちよつと予定がたくさんあるのであんまり書けません。  
なので、こんどこそ試召戦争について書きます

## 俺とバカと試召戦争（前書き）

久しぶりに更新しました

いやあ・・・ゲームっておそろしいですね・・・

ついゲームにはまってしまい、更新するのをすっかり忘れてしまってたんです

面目ない・・・



## 俺とバカと試召戦争

「ふぁー・・・眠いな・・・」

俺は今、眠気と戦いながら試召戦争のためにFクラスの教室に向かっていて

「あーあ・・・なんか最近頭痛が頻繁に起きるようになったんだけど・・・大丈夫なのか？俺・・・」

俺は、教室に向かいながらずっとそのことを考えていた

最近は頭痛が頻繁に起きるせいで、なかなか夜眠れないときがあるだが、なぜか学校では頭痛がそんなに起きない、大体一週間に一回学校で軽い頭痛が起きるくらいだ。ただ、ついさっきのような激しい頭痛は学校では4～5週間の間に一回起こるか起こらないからだから、俺は大体学校で寝ることになっている

そして今、俺にとって一番気になることを考えていた

それは――

「あの激しい頭痛の後に起こる・・・不思議な夢・・・それが、おれにとって一番気になることだ」

いつも、激しい頭痛の後に必ず不思議な夢を見るところ・・・それがおれにとって一番気になっていることだ

「あの夢・・・あの夢で出てきた人、出来事を実際に目の当たりにした気がする・・・」

そんなことを考えているうちに、いつの間にかFクラスのドア（？）の目の前についていた

「さて、もう試召戦争が始まるころかな？急いでいくか・・・」  
と、ドアを開けた瞬間――

「幸――！！！！」

――流下が飛び掛ってきた

「よつと」

そしてそれを避ける俺

ドタッ！

そして顔面から地面に着地した流下

「いたたた・・・もう！何で避けるのよ幸！」

「いや、そりゃいきなりこっちのほうに飛び掛ってきたら避けるに決まってるだろうが・・・」

いきなりこいつはなにやってんだか・・・

「幸の意地悪！せっかくFクラスまで遊びにきてあげたのに！」  
顔を膨らませて怒っている流下

ドスッドスッ

そして俺たちのやり取りを見て邪悪なオーラをだしながらカッターを畳に突き刺しているFFF団の御一行（明久と雄二も含め）

やれやれ・・・

「・・・ちよつといいか流下？」

「なによ？」

「一回、教室から出てくれない？」

「え？な、なんでよ・・・」

あいつら（FFF団御一行）に殺されかねないからだ

「いいから！あとで理由を言うから一回教室からでて！」

「もう・・・わかったわ、あとでわら人形に釘を刺しながら理由を聞かせてもらおうわよ？」

そのわら人形を誰にしたって釘を打つのが気になるところだ

「と、とにかく！一回出て！」

「・・・わかったわ」

そして、教室を出て行く流下。

「ふう・・・」

さて、これでゆっくり――

「さて・・・祭りを始めるか」

「YEAH！ Let's Party！」

――こいつらを虐殺することができる

（しばらくお待ちください）

「ふう・・・これで全員か？」

俺はFFF団御一行を鎮圧して俺の大好きな牛乳を飲みながら流下と話をしていた

「この人たち・・・FFF団だっけ？」

「ああ、彼女や不純異性交遊をしているやつを発見するとすぐさま正義の鉄槌とかほざきながら攻撃を仕掛けてくる外道どもだ」

「それ・・・言い過ぎじゃない？」

俺は真実を言っているだけだ

「さてと・・・おい雄二」

そこで俺は試召戦争をやる時間を聞くために畳の上でのた打ち回っている雄二に声をかけた

「な・・・なんだ」

「試召戦争は何時からだ？」

「試召戦争・・・？ああ、試召戦争なら・・・あと1時間で始まるぞ・・・？」

やばい、目が虚ろだ

「さすがにやりすぎたかな・・・？」

「やりすぎだ」

「即答ですか」

まあ確かにやりすぎだな・・・あとでなんか奢ってあげるかな

「まあいいか。雄二、俺は試召戦争の時間まで学校の中をぶらぶらしてるから、そのあいだにその傷を治しとけよ。いくぞ流下、お前をお前のクラスまで送ってってやるからこい」

「わかったわ。けどもうちょっと一緒にいたいんだけどなあ？」

「うるさい。さっさといくぞ」

そして俺は、FF団共を蹴散らしながら「蹴散らす・・・必要はない・・・はず」教室からでていった

## 俺とバカと試召戦争（後書き）

こんにちは、作者です

今回は更新が遅くなってしまい、まことに申し訳ございませんでした。

これもすべて・・・ゲームのせいです。

そうです。ゲームのせいです。すべてはゲームという天国への切符があるから悪いんです。

・・・え？ 例えがオーバーすぎるって？

いや、例えってのはそれぐらいオーバーでもいいんですよ？  
ばかなの？死ぬの？

くただいま作者が幸による暴行を受けています。しばらくおま  
ちくださいく

はい、冗談はここまでです

では、もう一回謝罪をさせていただきます

今回は更新が遅れてしまい、まことに申し訳ございませんでした  
実は、最近部活や塾などで忙しくてなかなか小説を書く暇がなかつ  
たんです（実話）

なので、また更新が遅れてしまうことがあるかもしれませんので、  
ご了承ください

では、感想お待ちしております

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3418v/>

---

バカと謎と記憶消失

2011年12月19日22時55分発行